

平成 25 年度

事業報告

平成 25 年 10 月 1 日から

平成 26 年 3 月 31 日まで

公益財団法人 日本数学検定協会

The Mathematics Certification Institute of Japan

<http://www.su-gaku.net/>

平成 25 年度事業報告

目 次

総合報告

- I 数学に関する技能検定の実施、技能度の顕彰及びその証明書の発行
- II ビジネスにおける数学の検定及び研修等の実施
- III 数学に関する出版物の刊行及び情報の提供
- IV 数学の普及啓発に関する事業
- V その他この法人の目的を達成するために必要な事業

平成 25 年度事業報告

総合報告

われわれの使命は信頼性と有用性が高く、学習指針として広く認められる数学に関する検定事業を実施し、得られた知見を社会に還元することを通じて、世界中の人々の生涯にわたる数学への興味喚起と数学力の向上に貢献することである。

当協会は平成 25 年 10 月 1 日をもって財団法人から公益財団法人に移行しました。今期は第 1 期として平成 25 年 10 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日までの事業報告となりますが、公益財団法人として報告すべき事業は以下の 5 点です。

- (1) 数学に関する技能検定の実施、技能度の顕彰及びその証明書の発行
- (2) ビジネスにおける数学の検定及び研修等の実施
- (3) 数学に関する出版物の刊行及び情報の提供
- (4) 数学の普及啓発に関する事業
- (5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

(1) では、「実用数学技能検定」に関する受検状況や検定を基本とした講習会等の報告、(2) については、旧財団法人では (1) に含まれていましたが、社会環境の変化に鑑み、1 つの事業として位置付けたため独立して報告を行います。

(3) に関しては、出版物の刊行や、その他の情報提供ということで現在話題の e-learning についても言及し、(4) は子どもたちの数学嫌いを少しでも減らしていくための方策として取り組んだイベント等に関する報告となります。最後に (5) では関係諸団体との交流活動をまとめています。

公益財団法人としてスタートしたばかりではありますが、数学を学習する環境はどんどんと変わってきており、当協会の役割もより重要になっています。今期の特徴としては、実用数学技能検定の受検に関して小学生の割合が増えてきたこと。企業からビジネス数学についての研修などの要望が増えてきたこと。さらに、学びの環境の変化によって学習コンテンツの ICT 化が進んできていることが挙げられます。こうした流れを俯瞰してみると、数学を学ぶ層が広がってきており、数学への関心が高まっていることに相違なく、当協会としては今後もそれぞれの事業を継続させ、有益な情報を発信していくことが求められていると感じています。

以下、来期につなげるための第一歩として、今期の各事業について報告いたします。

I 数学に関する技能検定の実施、技能度の顕彰及びその証明書の発行

この事業の公益性は、ほとんどの国民が学んでいる数学という学科を主軸とした学習指標としての検定を、全国津々浦々で実施していることから、年齢や経験を問わずありとあらゆる人たちが自由に参加できる生涯学習の場を提供できるという点にある。

平成25年10月から平成26年3月までの実用数学技能検定（数学検定・算数検定）受検申し込み者総数は、国内が202,314人、海外（日本人学校、補習校を除く）が881人、合計203,195人となりました。6か月分の受検申し込み者総数を前年と比較すると今年は約100人の減となりましたが、細かく見ると平成25年10月から12月の前半3か月間の申し込み者数は昨年度に比べ約4,000人減となり、その分を平成26年1月から3月の後半3か月間で取り戻したという状況です。これは公益財団法人に移行したことが浸透しはじめ、より信頼性を担保できた結果と捉えることができます。実施団体としては学習塾が増えてきていることや、4月から6級以下を「算数検定」として広く告知したことによる小学生の受検者増が特筆すべき点です。さらに、準2級の受検者も増えてきており、昨年と比べ高等学校の実施校が70校増えたことも報告に値することと捉えています。

「数学検定・算数検定」月別国内申し込み者数は次のとおりです。

国内の平成25年10月～平成26年3月までの受検者数

平成25年	受検者数(人)	平成26年	受検者数(人)
10月検定	35,480	1月検定	15,432
11月検定	52,726	2月検定	46,801
12月検定	26,611	3月検定	25,264
合計			202,314

※受検者数は申し込み者数を表示している。海外での日本人の受検者は含む。

さて、検定の充実を図るために、学習環境を整えることが必要ですが、その環境を地域ごとにサポートしていくためには、その指導者の育成が重要です。当協会では指導者育成を目的とした「数学コーチャー」という資格制度を設けており、今年度は新たに「数学コーチャープロB級」に18人、「同A級」には9人が登録されました。「数学コーチャー」の活躍の場として東京や大阪で「数学コーチャー」による数学講座を実施していますが、今年度は144人が受講されました。これらの講座については動画での配信についても開発を進めており、今後の学習環境の充実に寄与していく方策になると考えています。

この他、検定結果に関する分析についても受検者や検定実施校の指導者のみなさまの満足度を上げる重要な要素であるため、引き続き研究を進めています。

Ⅱ ビジネスにおける数学の検定及び研修等の実施

この事業の公益性は、公教育では伝えきれなかった社会や企業と数学との接点を明らかにしつつ、実社会における数学的リテラシーの向上につなげ、その有用性を認知させることによって、効率的な情報交換を行えるような人材育成につなげるという点にある。

今年度から、ビジネス数学検定をはじめとしたビジネス数学関連事業は、公益目的事業の1つとして報告することになりました。

ビジネス数学に関する報告事項としては、ビジネス数学検定、ビジネス数学に関する研修会等となりますが、今年度から主として捉えてきたビジネス数学検定を2次的要素として移行し、かわってビジネス数学に関する研修会をメインとした事業運営に変更しました。その理由として、企業側からの研修会に関連する要望が高まったことが挙げられます。

さて、これまでの研修会では受講者に対して「数学は好きか？」という質問をしてきましたが、約9割の方々が「嫌い」と答えています。これは本来の数学を理解していないことによる結果かもしれませんが、これらの現状を打破するため、平成25年12月からは研修会の名称に「数学」というキーワードを使わず「数的センス」を使用しています。その結果、研修会開催時期による影響も考えられますが、平成25年10～12月と平成26年1～3月の状況を比較すると、明らかに違う点が確認できました。以下、表にまとめていますのでご参考ください。

平成25年10月～平成26年3月までのビジネス数学関連受講者数

平成25年	受講者数(人)	平成26年	受講者数(人)
検定	258	検定	378
研修	60	研修	203
e-learning	8	e-learning	2
合計			909

この結果から、今後も研修会等の講座をメインに据えながら、そのチェックテストとしてビジネス数学検定を位置付けるという形式を進めていきます。なお、e-learningについては、動画を含めたコンテンツを作成中であり、来年度からリニューアルして提供することをめざしています。

Ⅲ 数学に関する出版物の刊行及び情報の提供

この事業の公益性は、数学の学習者はもとより広く国民のみなさまに、学習材や情報誌あるいはネットを用いて学習情報を提供したり、学習経験者のさまざまな声を、新たな学習活動を起こそうとする方々に届けたりして、生涯学習の輪を広げたりしていこうとする点にある。

これまで出版してきた過去問題集は、「2012・2013年度版」として提供してきましたが、平成26年度に向けて新たな過去問題集を刊行しました。表紙のデザインを一新し「数学検定」と「算数検定」の区分けをわかりやすくして発行することができました。発行した階級は準1級から11級までの12種類です。

また、過去問題集ばかりでなく数学や算数のどの単元をもとに出題されているかという公式的な問題集の発刊の要望にも応えることができました。今年度は数学検定・算数検定の「要点整理シリーズ」として、準2級から11級までの10種類の問題集を発行することができました。こちらについては講習会などで利用したり、この内容をもとにした動画コンテンツをまとめたe-learningツールに加工したりして、さらなる活用を図っていきます。

ネットの利用については協会の公式ホームページの改善はもとより、FacebookやtwitterといったSNSを活用した情報発信についても積極的に取り組んだことで、「算数検定」を活用している釧路市の小学校のPTAの方々との接点ができるなど、新たな交流を見出すことができました。

また、平成26年度後半から始動させる予定の検定受け付けシステム「SKALE」の開発では、要件定義までを終了することができました。この稼働により、団体受検の申し込みの改良はもとより、新たな情報発信を確立することが可能となります。

今後は数学的な読み物等を他の出版社と協力しながら展開する方法等も検討していく方針です。

IV 数学学習に関する普及啓発活動

この事業の公益性は、不特定多数の人が参加できるイベントで共通の課題やテーマを通して、子どもと大人が一緒になって楽しんだり、学んだり、生涯学習の実践をとおして数学の大切さ、楽しさを普及啓発していく点にある。

老若男女を問わず、数学が話題になるようなイベントとして「第3回数学・算数川柳&俳句&短歌」を開催し、世界的に「 π 」の日と言われている3月14日に入賞者を発表しました。例年どおり選考委員長には作家の森村誠一先生をお迎えし、「数」「算数」「数学」というキーワードやイメージを詠み込んだ川柳・俳句・短歌を募集したところ、今年度も全国から10,000句を超える作品が寄せられました。大賞には「平行線 少しかたむけ 仲直り (川柳)」「大寒や 窓の水滴 平行線 (俳句)」「十一の 数字の羅列は 覚えている 覚えているけど ボタンが押せない (短歌)」がそれぞれ選ばれました。

この他、葛飾区教育委員会共催で18歳以上の人たちを対象に、「統計・確率」「相似」「2次方程式」の分野を中心に「大人の数学講座」を開催しました。また、親子を対象に地域の教育委員会の後援で「かがやく算数・数学講座講習会」を開催し、小学生には「整数と計算」「小数」「分数」を、中学生には「数と式」「図形」「関数」などの分野を中心に分かりやすく丁寧に指導してまいりました。講習会の開催日と受講者数は次のとおりです。

開催日	対象	受講者数(人)	会場	結果
10月12日	親子	47	西新パレスホール	事後のアンケート大好評
12月21日	親子	175	葛飾区ウィメンズパル	同上
平成26年				
1月25日	大人	36	葛飾区新小岩地区センター	同上
2月8日	大人	10	同上	同上
2月22日	大人	21	同上	同上

講座講習会には計289人の参加を得ました(2月8日の講習会は、都内が大雪に見舞われたことにより、参加者が少なくなりました)。

講演会等の実施は次のとおりです。

開催日	講演内容	対象	受講者数(人)	会場
1月25日	日常生活に潜む確率	大人	36	葛飾区新小岩地区センター
2月8日	一筆書きのヒミツ	大人	10	同上
2月22日	予測する数学	大人	21	同上

上記の講演会に合計67人の参加がありました。

この他、算数体感プログラムと称して、体を動かしながら数や形や量などを体感させる取り組みを広げるため、そのインストラクターの養成を岩手県の被災地で行いました。

V その他の事業（関係諸団体との情報交換及び連絡提携）

この事業の公益性は、有識者との交流を通して、数学の生涯学習とは何か、数学の学習とは何か等の疑問に答えながら、生涯学習の概念を拡張していく点にある。

平成 26 年 3 月 9 日に「数学協働プログラムシンポジウム」（文部科学省・統計数理研究所共催）が開かれ、当協会として後援をさせていただき、参加者募集の PR に協力いたしました。本シンポジウムは「世界は計算！されている？」をテーマに、サイエンスナビゲーターの桜井進先生がファシリテーターとなり、著名な先生方を招いて普段はなかなか意識されない科学や社会の分野で役立っている数学の力を、参加者に実感してもらうための講演やパネルディスカッションが行われました。

その他、栃木県宇都宮市で行われた日本数学教育学会主催の秋季研究大会やブロック・県大会、茨城県つくば市で行われた「小中一貫教育全国サミット」（小中一貫教育全国連絡協議会ほか主催）をはじめ、学習塾関連団体のイベントなどに出展し、関係者との親睦を図ることができました。

平成 25 年度事業報告 附属明細書

平成 25 年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第 34 条第 3 項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しない。

平成 26 年 6 月
公益財団法人 日本数学検定協会